

コラム…吉田公平先生

(東洋大学名誉教授)

清水安三と中江藤樹



清水安三は一八九一年(明治三四年)に滋賀県高島郡新儀邑に生まれた。安井川小学校、安曇高等小学校、

滋賀県立第二中学校(膳所中学校在学中に大津教会で受洗)を経て、一九一〇年に同志社神学部に進学。一九一五年大津歩兵連隊に志願兵として入隊。一九一七年除隊し、中国伝道を開始。一九二一年、北京に崇貞女学院を設立。その後基督教伝道活動、文筆活動を果敢に展開。一九二三年八月四日、夫婦共に横浜港から米国に向けて出港。オベリン大学に入学。オベリン大学卒業後、北京に帰着。その間『基督教世界』編輯主任、同志社専門校非常勤講師。一九三三年美穂夫人逝去。一九三五年小泉郁子と結婚。北平に転居。一九三七年盧溝橋事件起こる。一九四六年三月、日本に引き揚げ五月に桜美林学園(現桜美林大学)を創設。一九八八

年一月七日、急性心不全で逝去。著作は十四冊。関連著書は太田哲男『清水安三と中国』の巻末に紹介されている。その中に『中江藤樹の研究』桜美林学園出版部、一九四八年。『中江藤樹はキリシタンであった』桜美林学園出版部、一九五九年。『中江藤樹』東出版、一九六七年。の三書が紹介されている。小生は『中江藤樹の研究』『中江藤樹はキリシタンであった』は未見である。但し、ここに紹介されていない『史的中江藤樹―藤樹学派の抵抗―』刊記無し。『まえがき』は昭和三四年(一九五九年)八月二五日に執筆。油印。ガリ版摺り。『中江藤樹はキリシタンであった』を未見なので確信はできないのだが、この油印本を活字印刷したのもかもしれない。その八年後に出版された『中江藤樹』はその新装版であるのかもしれない。小生が架蔵するのは、『朝陽門外』朝日新聞社、一九三九年。『開拓者の精神』隣友社、『支那の心』隣友社、昭和一六年。『北京清譚・体験の中国』教育出版、一九七五年。のみである。以下の『支那新人と黎明運動』大坂屋書店、一九二四年。『当代支那人物』大阪屋書店、一九二四年。『支那革命史論』南満州教育会、一九二九年。『支那の人々』隣友社、一九三八年。

『姑娘の父母』改造社、一九三九年。『続支那の人々』隣友社、一九四一年。『支那人の魂を掴む』創造社、一九四三年。『希望を失わず』桜美林学園出版部、一九四八年。などは架蔵しない。清水安三の全体像について語るには小生は適任者ではない。その意味では太田哲男が相応しい。太田哲男の『清水安三と中国』の巻末に桜美林大学に於ける清水安三研究など状況についての情報が掲載されているのはありがたい。その後の十五年の状況は一新したかと思うが。小生は不勉強のままである。清水安三の中江藤樹論の特色は二点ある。一点は伝記研究の獨創性である。もう一点は、中江藤樹はキリシタンであったと断言したことである。とても興味深い指摘であるのだが、後に言及することにする。今は次の二書を紹介することにする。一つは山崎萌子著『朝陽門外の虹 崇貞女学校の人びと』岩波書店、二〇〇三年。清水安三の本領を活写大作である。盧溝橋事件以後の日本軍の侵略の中での快挙である。もう一つは淵田隆雄著『天命の人―小説中江藤樹―』である。清水安三の中江藤樹理解と重なるが、改めて考察することにする。

ひじりの声 上田 藤市郎

今自分が見聞きしている人やものを、本当に信じていいものなのかどうかをしつかりと確認することが大切な時代である。「石橋をたたいて渡る」という諺があるように人生においては、用心の上にも用心を重ねよと古人も忠告している。

インターネットを悪用して金銭をだまし取る犯罪が広まっています。多くの人々が被害に遭っている。我々には「人間は本来的に善人である」という性善説が心のどこかに宿っていて、その人の良さにつけこまれて多くの人々が被害に遭っているのかもしれない。「人を見たら泥棒と思え」という戒めの方に考え方を要するべきなのであるうか。

私たちの日々の生活の基盤である金銭やカード、市民生活の約束や決まりなどは、「相互の信頼」のうえに成り立っている。世界や日本の政治家の発言や行動もそれを信じる人々の「誠意」に支えられている。それらが今や、戦争、内乱、関税を発端とする経済の混乱などによって危機に瀕している。「信」という文字が表すように、人間の言葉がそのまま行動に現れるのが「信頼」でなくてはならない。言葉をもてあそぶものは、絶対に指導者になるべきではないし、私たち自身が明確に拒否する姿勢を貫かねばならない。「信頼」こそ時代を超え、世界に普遍的な私たちの合言葉である。